

■四季妖抄（しきようしょう）

その一 雪割

乱世

戦乱の世であった。

京の都は西寺の五重塔もとうに焼け落ち、ただ御所の中のみが古（いにしえ）の繁栄の残り香をわずかに漂わせているに過ぎない。そのすっかり荒れ果てた都の大路のひとつを、今ひとりの公家が御所へと向かっていた。男の素性は今となってはあまり定かではないが、このときは六位の位を与えられて蔵人の任に就いていた。名を伴蕪麻呂（とものかぶらまろ）という。この蔵人という役柄、身分は上流貴族に及ばぬとはいえ、帝近くにお仕えできる故をもって、もし平安の世なれば世間からもそれ相応に見栄えの良いものだったはずであるが、この戦乱の世となってみれば帝のおそば近くにて平安で暮せることの他に、いかほどの果報があろうか。

その日は、珍しく洛外の龍生寺を預かる園心上人が昇殿してきており、蕪麻呂は軽く会釈をしたところをこの上人に呼び止められた。上人とは、上人が出家する前からの馴染みであって、その後も年に数回くらいだろうか、出会った折には親しく言葉を交わしている。「蕪殿ではありませぬか。まあまあ、しばしお待ちください。」

「これはこれは、お珍しい。御坊はたしか今は遠くにお暮らしのはず。ご祈祷か何かですか。」

「まあそんなところですよ。今宵は夜通しになることでしょう。」

だがその言葉の後で上人はふとそこで声を潜めて、「というのは表向き。相手がそなた故お話しすると、実は雅楽師に妙なものがとり憑きおりましたようで。そのお祓いに召し出されましたのじゃ。人は時々、人や獣の霊（ことだま）に憑かれることがあると聞いておりますが、このたびも話の内容からすると、どうやらその類のようでございます。」

「や、それは難儀なこと。今宵は私も宿直（とのい）を仰せつかっておりますにより、何かありましたらお声をかけて下さいませ。」

「それは何より心丈夫なことじゃ。何分にも良しなに。」

上人は合掌してから奥へと進んで行った。

鼓の怪（け）

その夜はたいそう寒い夜で、上人も火鉢で暖をとりながら病人のそばで読経していたが、

病人が一向に眼を開ける様子がないので、夜のふけるころには半ば眠くなりそうな意識に襲われながらの務めとなっていた。

と、病人が不意に寢床から起き上がり、何やらぶつぶつと呟き出した。上人は懸命に耳をすましてその言葉を聞き取ろうとしたが、不思議なことに単語ひとつひとつはわかっていると思われるのに、それらが上人の頭の中で全体的にひとつの意味としてまとまることがなかった。

上人にとって、そんなことは今までにはなかった。いや、他の誰であっても恐らく今彼が感じているのと同じ奇異な思いがするに違いない。もしそうならば、おおそういえば今宵は蕪殿がすぐそばに詰めているはず、あの男なればそのことを立証して拙僧のこの不安を取り除いてくれるやもしれぬ・・・。

そう思い立った上人は、外に控えていた武者を呼び、蔵人の寮への使いを頼んだ。

しばらくすると、蕪麻呂が心配顔でやってきた。

「御坊、どうかなされたか。」

「実はこの御仁の言葉が、聞き取れているようでありながら、どうもよく聞き取れぬ。そなたの意見を聞きたくてのお。」

「ほほお。」

蕪麻呂も昼間話を聞いたときから実は少なからず気にかかっていたので、さっそく病人に近づいてみると、それは鼓の名手として名高い藤原の某（なにがし）であった。じっと耳をそばだてていると、それは単なる声ではなく、なにやらこちらに流れてくるもののよう思えてきた。

「ああなんとしたことであろうか、望む音を出してくれる者と出会うことが、かように待ち遠しく齒がゆいものとは。」

蕪麻呂には確かにそのように聞こえた。見ると枕元から少し離れたところに一張（はり）の鼓がある。彼は吸い寄せられるようにそちらのほうに寄っていった。

「や、蕪殿、どちらへ。」上人が問う声ももはや耳には入っていない。彼は鼓を正面にして胡坐をかいた。

「あの者にとりついてもう七日目になるが、ここへ来たのはお主が初めてじゃ。よく余だとわかったの。」

「望む音を出してくれる者、という声が聞こえたものでな。この部屋で音に関係するものといえばそなたしかおらぬ。」

「それがなかなか余の言うことわからぬ者ばかりが来おる。そこな僧とて同じこと。聞き入ってはいても、余の言葉の意味を少しも理解しておらぬ。」

「そのようなものか。わしには普通に聞こえておるに。さてそれでは、話を聞こう。何か満たされぬことがあるからこのようなことをしているのであろうが。」

「よかろう。」

鼓が語るところによれば、彼はこの物語の時代から数えることそれよりおよそ百五十年ほど前に、柏の匠（かしわのたくみ）と呼ばれる名工の手によって仕上げられ、「雪割」と名づけられた。その後、雅楽寮に献上され、様々な奏者の手に渡ってきたが、誰一人と

して「雪割」自身が最高と認める音を鳴らせるものがなかった。やがて彼は最高の奏者の手に打たれる時を待ち望みながら、そのような音があることにすら気づかぬ奏者たちの手にばかり渡る己の運命を呪う霊媒体となるに至った、というのである。

「この者として、世に聞こえるほどの腕前はたしかにある。調緒（しらべお）の操りにかけては当世に並ぶものもおるまい。だがそれでも余には出してほしいと願う音が別にある。その音を打ち出してくれる奏者と出会える日を余は待ち続けて百五十年あまり、ついに余は誰か救ってくれる者が現れるようにと、この者の口により、余の言葉を伝えさせることにした。そうして今日でもう七日目、ようやく余の言葉を解する者と話すことができたというわけじゃ。それにしても、ああこれから先もその日は来るものか来ぬものか・・・そなたはどのように思う。」

蕪麻呂はしばらく考えて、こう答えた。

「察するに、お主の求める音というのは、おそらくこの世のものでない。天には三千世界あり、それぞれのみ仏の周りには天女がいて、あらゆる楽器を奏でてみ仏にお仕えしていると聞く。天界にはあるいはそなたの満足する奏者がいるやもしれぬ。」

「余に、女子（おなご）に奏でられろと申すのか。」

「経にはこうある。天女も故あってなる仮の姿にすぎず、望めばいつでも男になれる存在だと。そもそも男女の別というのは、この世のみの理（ことわり）であって、すべては空。それがみ仏の教えなのだ。」

「余の願いが天で叶えられると何故そなたに言える。そなたはまだ生身であろう。」

「では一度行ってみたらどうじゃ。それでわしの言うことが違っていたら、またこの世に舞い戻って最高の奏者を探すがい。それにみ仏のお知恵とは人知のはるか遠く及ばぬもの。み仏の手におすがりすれば、あらゆる願いは叶えられるであろうと、わしは思う。だが誰であろうともとり殺したら、それこそ天界には行けぬぞ。それでもよいのか。」

「たしかに道理じゃな。では行ってみる事にしよう。さらばじゃ。」

「これ、蕪殿、どうなされた。」

今まで話していたのとは別の声が出た。気がつけば上人の顔が彼の目の前にある。どうやら彼の顔を覗き込んでいたらしい。

「ああ上人殿か。いやなに、鼓となちよっと話をしていたのだよ。」

「それが、少し前、その鼓が突如として消えてしもうた。不思議なことじゃ、」

なるほど、見れば先ほどまで目の前にあった鼓が無くなっている。

「ははあ、なるほど。ところで病人はいかが・・・。」

「どうやら寝言のようなものはなくなり、普通に寝入っているように見受けられます。」

やがて夜が明けると果たして奏者は目覚めて、元通りに動くことも話すこともできるようになっていた。蕪麻呂は奏者と上人に、鼓・雪割との話の一部始終を話して聞かせた。「私の技ではさぞや不満足であったのでしょう。自分では一人前のつもりでおりましたが、なんともお恥ずかしい限り。この上はあの鼓が、天女の手で打たれることを遠いこの世から祈りましょう。」

まだ春浅い清らかな光を浴びて奏者はそう言って手を合わせ、上人は経を唱えた。

蕪麻呂は天界で天女の肩に載せられる雪割の鼓の姿を上ってきたばかりの朝日のなかに

見たような気がした。

その二 桜衣

山道

数日後、蕪麻呂は帝のお使いを仰せつかって、上人の寺を訪れた。寺は宇治の、とある山の中腹にあり、道のところどころには山桜が小さな膨らみを枝のそこかしこにつけている。赤と緑のつぼみは遠からず来る満開の花の光景を想像させる。

行く道に 近づく春の 山桜 花満開の 頃に來まほし

「そういえば、先日の雪割はもう騒ぎ立てておりませぬか。」

勅命を終えれば、やはりそこは旧知の仲、茶菓子を真ん中にして向かい合ったその瞬間から他愛のない世間話が始まる。

「あれ以後は何も聞こえては参りませぬな。」

「いや、蕪殿のおかげでございますなあ。どうやら拙僧はまだ修行が足りないものと見えます。蕪殿のように、霊の言葉が理解できるようになれば本当の意味での供養などできないのかもしれないかもしれませぬ。ただ心を澄ませるばかりではなく、心の目と耳とを備えなければと近頃は考えておりますが、果たして何をどうすればよいのかと。堂々巡りでございます。」

「なんの、ご謙遜を。上人殿の説法の噂は、御所のここかしこ響いております。あの夜は、鼓の霊がたまたま私のほうに気を向けてくれたただけのこととございましょう。」

さてそろそろと暇乞いして先ほどの道を降りていくと、見覚えのある牛車がこちらにやってくる。蕪麻呂は牛を引いている従者に声をかけて車を止めさせた。

「これは蔵人頭様のお車か。」

「そうでございます。あなた様はたしか伴蕪麻呂様でいらっしゃいますね。」

「うん。蔵人頭様にご挨拶がしたい。しばらく止めていてはくれまいか。」

「かしこまりました。」

そんなやり取りの後、彼は牛車の御簾の前で膝をついた。

「恐れながらご挨拶いたしたくお車をお留めいたしました。蕪麻呂でございます。」

その声に反応して御簾を上げて姿を見せたのは、思ったとおり彼の上司に当たる菅野実道であった。

「おお、そなたか。今日はたしか・・・。」

「はい。帝のお使いでこちらに参っていたところとございます。」

「そうであった。いや近頃とんと物覚えが悪うなったものとみえる。いやいや年はとりとらないものじゃのお。ほほほ。」

実道はどこか違和感がある笑い方をした。それにこの聡明な上司がもの忘れに悩んでいようとは到底思えない。どう考えても不自然なことだと蕪麻呂は思った。

歌の事ども

それからさらに数日の後、蕪麻呂はその蔵人頭実道の屋敷に招かれて酒を勧められていた。夜更けにはたけなわをとくに過ぎ、使用人たちもいなくなって二人きりになった。

「ときにそなた、妻は幾人ほどになったかな。」

「二人おりましたが昨年一人流行り病で。」

「それは気の毒なことを訊いてしもうた。許せよ。」

「いえ。とんでもございませぬ。」

かつて彼には妻が二人いた。問われて久しぶりに、亡くなったほうの妻の顔が彼の記憶をよぎった。ふくよかでしっかり者でよく世話を焼いてくれたものだ。

「何を突然と思ったであろうな。実を申せば、このうちには娘がひとりおるのじゃが、なかなか普通の女子のようにはいかぬらしい。」

もしかしたら今宵、蔵人頭の館によばれた理由（わけ）はこれであったのかと、蕪麻呂はこのとき気づいた。

「と、仰いますと。」

「その母から聞くところによると、あれには生まれながらにして肩口に大きな赤あざがあるそう。女はやはり白い肌と黒髪的美しさが何より。あざがあることが知れば、到底望みは持てぬであろうと、あれの母ともども諦めておる。もっとも今こうして話していること自体、もうすでにそなたに期待しているのかもしれないがな。」

「これは。私ごとき蔵人頭様から期待されるほどの者ではありません。」

「いやいや、先日の物の怪のこと、上人殿から聞き及んでな。親の身勝手と知りながら、そなたならもしかしたら娘のことも任せられるかもしれぬと思うて、思い切って宅まで来てもらうわけじゃ。」

「そうでございましたか。それならぜひともお会いしてみたいと存じます。と申しましてもそこはやはり男女のあいだのこと、いろいろ手続きを踏みませんと。」

「うむ。」

「ついでに、歌をひとつ作らせていただきますので、姫様にお渡し願えればと存じますが。」

いまだ見ぬ 花をおもひて あらたまの 寝待の月の 夜も更けにけり

明けてその日も夕暮れ時になって蕪麻呂の屋敷に返歌が届けられた。扇に桜のつぼみが添えてあり、歌はその扇に書き付けられていた。

花細（はなぐわ）し 桜もあまた あるものを 空に染まりて 人隠れせむ

別の日に訪ねて行くと、今度は直接女部屋に通されたので、御簾越しに桜色に染め抜い

た扇を差し出した。

願わくは 思う色にて 染まるらむ 世に幾千の かさねあるとも

御簾の奥からは筆を運ぶときのかすかなむ音と、墨のほのかな香りが聞こえてくる。返歌、

桜躑躅（つつじ） 萌黄牡丹の 唐衣 染まる川面を 心ゆくまで

また別の日に訪ねていった彼は、来る途中で手折った山桜の、もういっぱいほころんでその日にでも咲きそうな紅色と、若葉の緑で彩られた枝を、この日にととう御簾をくぐって手渡しする機会を得た。初めて見るその顔には、覗き見る己の顔がそのまま映るほどに澄みきった瞳と、黒髪に半ば覆われながらも白い光を放つ頬とがあった。

かぎろひの 春にふくらむ 花つぼみ 深き山道 越えてこそ見れ

そしてその夜が、二人の婚儀となった。

梟（ふくろう）

そうして数ヶ月が過ぎ、そろそろ若葉が萌え出ずるであろうと思われる頃には、蔵人頭の娘・桜衣の君は蕪麻呂の胸の中でも深い眠りにつくようになっていた。月の明るいある晩、蕪麻呂はもうすっかり知り尽くした彼女の肩の赤あぎを愛おしく撫でていた。

このようなものがあるとも、桜衣はじゅうぶんすぎる程に美しい。それにしても、このあぎのことがなければ父君はこの人と自分とを引き合わせることは無かったかもしれぬ。してみれば、このあぎも欠点どころか逆に縁結びの役を立派に果たしてくれたとは言えぬであろうか。

と、指の先にあったその赤あぎがにわかに膨らんだかと思うと、まるで鳥のように二、三度羽ばたいて桜衣の細い腕に乗った。

「や、これはなんとしたこと。」

よく眼を凝らしてみるほどに、黒い影を落とすそれはどうやら梟のようであった。

「そなたは何だ。」

「わしか。わしは彩女（あやめ）という。これでももとは人の子であったが。」

「それが何故あぎなどになって娘にとりつく。そなたのおかげでこの桜衣がどのように悩み苦しんできたかを思うと、わしには察するに余りある。」

「女の顔立ちが人並みか、よしんば幸いにして人並み以上であったとしても、あぎなどがあれば男たちはみな離れていく。わしの何度か過ごしたうちの最初の前世もそうであった。そこでわしはその最初の生涯を終えるときにこう願うた・・・生まれ変わるたび、女の肌

の上のあざとなり、真に心通わせるものの現れるのを待とうと。だが、そうしてもう幾度目の世となるのか、とうとう己でもよくわからぬほどになってしまった。」

梟は横を向いてうつむいた。その顔がもし人ならば、深い悲しみ憂いを読み取ることができるに違いないと彼は思った。

「そういうことならば、同じ人としてわからぬでもないが。それが今になって何故姿かたちを変えた。」

「何を申す。そもそもわしを鳥の姿にしたのはそなたではないか。」

「わしにはそんな覚えはないぞ。だいたいそのような力など持ち合わせておるはずもなからうに。」

「いや、それはそなた自身にもわからぬだけの話。だがたしかにそなたのせいなのじゃからな。そなたと桜衣の思いの一途さ、睦みの極みと感じ入った。もはや思い残すことはない。今わしは心からそう思うておる。あるいはそれがこの姿になった由縁なのであろう。」

「ならばこの桜衣の体から離れてくれるのか。」

「わしが鳥の姿になどなったのも、おそらくそのためであらうからな。それにもうそろそろ人の身には飽きた。鳥の世界ならば心がどうのこうのと言うこともあるまい。」

「鳥や獣の世界とて心あるべしとわしは思うているが、少なくともしがらみの多い人の世よりはずっと住みやすかろう。達者で暮せ。」

梟は一たび頷いて、細い月の光の中を高く舞いながら消えていった。桜衣の肩にはもう白い肌のほかに何もなかった。

「朝日がのぼったら鏡を見せてやろう。さぞや驚くことであらうな。」

彼は桜衣が目覚めるまでその丸みを帯びた肩をそっと撫でていた。

その三 葵

献上茶碗

そろそろ草の香りが辺りの空気に溶けるのが感じられるようになったある日、蕪麻呂は帝の御前で書物や物品などを整えていた。そうして帝がお読みになられる書類や、献上されてくる品物をを事前に整理し、また帝が処理されたものをそれぞれの管轄に戻しやすいように並べ替えておくことが彼にとっての主な職務であったが、特に指定されて彼自身が直接帝からの文（ふみ）などを仰せつかることもあったので、その役目柄、公家以外にも幅広い層の人々とも付き合いがあった。

「や、これは。」蕪麻呂が思わず呟いたその声を、帝がお聞きとめになった。

「いかがした。」

「は。申し訳ございません。奈須清繁（なすのきよしげ）からの献上品がございますようで、懐かしさに我を忘れましてございます。」

「ほお、清繁か。そなたとはたしか入魂（じっこん）の間柄ではなかったか。」

「御意にございませう。あれが都を離れましたのはもうかれこれ六年ほど前でございませう。」

ようか。」

那須清繁は皇族や公家に仕える陶工である。蕪麻呂はいつぞや帝の勅使としてその窯を訪ねて以来、陶器作りに生涯をかけるこの男の風情に惹かれ、窯のそばの庵をたびたび訪れては酒を酌み交わすようになっていったのであるが、しばらくするうちに清繁はふいと西国へ旅立った。京の土もよいが、西国の土もどうやらよいらしい、そんな噂を聞いたからだというのがその理由である。実際、都を離れてからも年に二、三度は献上品が送られてきていたが、それがここ二年ほど何も送られてきておらず、蕪麻呂もいつしか忙しさにかまけてその名を忘れかけていたのである。

「さて・・・。」

清繁献上の茶碗を前にした帝は、困った顔を見せた。この帝はいろいろな表情を惜しげもなくお見せになる方だなど、蕪麻呂は常々嬉しく思っているのだが。

「いかなされました。何か不都合でも。」

「いや。だが朕の気のせいかな、この茶碗にはどうも何か足りないように思えてならぬ。清繁作はかような様子ではなかったはずなのだがな。」

「そのようにご覧遊ばされましたか。私めにも拝見させていただいてよろしいでしょうか。」

「うん。おお、そうじゃ、これまでの清繁が作をすべて持て。比べてみればそれか否かがよりわかるであろう。朕もそうしてみたい。」

「かしこまりました。ござりまする。」

しばらくののち、帝の机の上にこれまで清繁が献上したすべての茶器や花器、皿などが並べられた。献上されるだけのことはあって、どれもこれも見事な出来栄であったが、その中でその日献上されてきた茶碗をあらためてじっくりと眺めるほどに、うっすらと月の影に桔梗の花が描かれてなかなか趣（おもむき）深い。形もしっくりと手に馴染む様子が見て取れる。だが、それひとつだけが他の作品と様相を異にしているのだ。

「どうかな。」

「仰せのとおり私めにも見受けられます。何か、考えあぐねて作ったような。清繁に迷いでも生じておるのでございましょうか。」

「やはりの。だがそなた何か聞いておらぬのか。」

「いえ何も。初めの頃は便りも出そうかと思いましたが、それでもし都を懐かしみ未練が生じてはと、思いとどまりましてござりまする。清繁は土を求めんがために西国に下ったようにござりますゆえ。」

「しかしその結果がこれでは惜しい。そなた、折を見て清繁の様子を見てはくれぬか。」

「仰せのままに。」

その日の午後、蕪麻呂はさっそく清繁の屋敷に使いを出して様子を調べさせた。使いの話によると、清繁は筑前のあたりに窯を築き、妻子を呼び寄せてそこに落ち着いているとのことであった、甥にあたる者に屋敷の管理と都での取引を任せているとのことなので、蕪麻呂はその甥を呼び寄せて直接話を聞くことにした。

「わざわざ呼びつけてすまなんだの。」

清繁の甥とはこのとき初めて対面するが、伯父に似ず気の弱そうな顔つきの青年であった。これまでも幾度も公家の屋敷を訪れているであろうに、控え方そのものがぎこちない。

「とんでもございません。私のようなものがお公家様のお屋敷内（うち）に上がらせていただくなど、まことに恐れ多いことでございます。」

「まあ、ここではそう遠慮せずともよい。そなたは存ぜぬであろうが、そなたの伯父とは昔酒酌み交わした仲じゃ。悪いようにはせぬ。」

「恐れ入りまする。」

「ときに、伯父はいかがしておる。今日そなたを呼んだも他でもない、それが知りたいのじゃ。ここ二年ほど、清繁作の噂を聞かぬ。病にでも臥せっておるのか。」

甥はしばらく話すのを躊躇っているようであったが、御簾越しでなく直に顔をあわせている蕪麻呂の穏やかな表情を見て取ったのだろう。とうとう決心をつけた様子で話し出した。

「実は、伯父は近頃、満足がいかぬと言っては、自分の作るものを壊してばかりいるのでございます。先日はやっと私のたつての願いでひとつ献上させましたが、それとて出来れば差し上げるのは控えたいと申ししておりました。」

「ほお。」

「しかしながら、あまり長い間ご献上申し上げないというのも帝に対し奉り大変失礼になりますし、その年月が重なりすぎますれば、宮中にもお出入りを許されなくなるかもしれませぬ。そうなれば伯父にも本当に良い作品が出来なくなるような事態に陥るかもしれぬと、こう説得した次第でございます。」

「なるほど一理ある。しかしそれにしても、満足のいくものができなくなっているとは、いかにも尋常ではないの。どのようなわけなのであろうな。」

「それは私にもわかりかねますが、どうやら筑前に移りましてからのちのこのことのように。」

「一度会って昔のように話がしてみたいもの。なんとか呼び寄せることはできぬか。」

「蔵人様のお言葉とあらば伯父も喜んで上ってまいりましょう。またもしそれで今の状態が変わるものであれば、私もいかようにも取り計らう所存にございます。今の伯父を見ると、私も見るに忍びない思いにかられるのでございます。どうか伯父をよろしくお願い致します。」

「うん。」

それにしても、あの清繁に今何がおきているというのであろうか。

所違（ところたが）え

それからおよそ半月ほどが過ぎ、上京してきた清繁は早々に蕪麻呂の屋敷に招かれることとなった。久しぶりに見る彼は、日焼けして以前にもましてたくましく見えた。とりたてて病とも思えぬ。

「このたび蔵人様には私のような者にお声をかけていただき、清繁、身に余る光榮に存じます。」

「元気そうで何よりじゃ。まずは一献。昔のように語らおうではないか。」

「は。」

しばらくは彼が住みついている田舎の風情豊かな様や、互いの妻子についてのその後のことなどが話題になった。久しぶりに見る顔、聞く声に、蕪麻呂も時の経つのを忘れるほどであった。

「とにかく題材を探すには事欠きませぬ。それにそのあたりの土のきめ細やかさといったら。陶工には正に理想的な土地でございます。」

清繁は、夢見心地で言った。都と異なる稜線の山々に上ってきたばかりの朝日が映え、そこに燃え立つ緑、大海原に月の光の写る様など・・・。

「だが、それでも満足できずに作を割ってしまうそうではないか。それもかの地に移り住んでからと聞く。それはどうしたわけか。近頃、そなた作の噂をあまりにも聞かぬようになったゆえ、ちと気になってな。」

帝との会話のことは、この男やその一族には伏せておいたほうがよかろうと、蕪麻呂は考えていた。

「それが私めにもどうにも分かりませぬ。作はひとつひとつ精魂込めて手がけておるつもりなのでございますが、できあがってみると、どこか意に沿わぬものが大半、そんなことになっております。」

「うーむ。」

「筑前の土に自然、もはやこれ以上望むものはありますまいに。」

何か、ひっかかった、

「ん、今なんと申した。」

「はあ。筑前の土に自然、これ以上望むものはありますまい、と。」

「筑前、か。」

蕪麻呂は、はたと膝をたたいた。

「ならば一度、昔のように都の窯で焼いてみるというのはどうかな。その頃と今と何かが違うのだとしたら、それは窯の場所と何らかの関係があるのかもしれない。もしかしたら、人同士に相性があるように、人と土地とのあいだにも相性があるのではなかろうか。一方が良かれと思うても、もう一方がそれと合うていなければ本当に良いものはできぬ。作とはそうしたものではないかの。たしかに都の土は多少粗く、また四季折々のことも田舎のほうが捉えやすいであろう。だが筑前の自然やそこに流れる時の流れの速さは、本当にそなたに似合うておるのであろうか。わしにはどうもそれが案じられる。」

清繁はしばらく考え込んでいたが、都で作ってみることを約して帰っていった。

古里

翌朝の明け方近く、清繁は夢を見た。

どこか高貴そうな屋敷の床に、自分がこれまでに手がけた陶器が、すべて一列に並べら

れている。

そこへ二匹の雌鹿が跳ねてきて、器の中に入れられた葵の花々を順に食べ始めた。清繁が見入っていると、一方の鹿が彼のところへ寄って来て一緒に食べようと言う。するとそのときもう一方の鹿が最後の茶碗を見て首を振っている。いかがしたものかと近寄ってみるとそれだけが空なのであった。

彼は目覚めるとすぐ自分の庵のなかに設けられた作業場に足を踏み入れた。作業場は、おそらく甥が綺麗に手入れをし続けていてくれたおかげであろう、まるでそのまま昔に戻ったかのように思われた。その光景の中で、つい今しがた夢で見ていた自分の作品のことを思い起こすと、それらはひとつを除いてすべてこの窯で焼かれた。

そのまま続きの窯のほうへと歩き出す。幼き日に父から教わった土の扱い方、窯から出れば母が作ってくれた食事、仕事の合間の友との語らい、後に彼の妻となった少女から花を手渡されたこともある。そういえばあのときの花は、たしか葵であった……。思い出のすべてがこの窯と共にあった。ここと比べてみれば、西国にある窯は、なんと粗雑で冷たく思えることだろう。

二月（ふたつき）の後、陶工は再び蕪麻呂の館を訪ねた。

「お約束のものをお持ちいたしましてございます。」

「ほお、それは楽しみであるな。」

「まずはご覧くださりませ。」

包みを解いて差し出されたものは、先日献上されたものと同じ大きさ、ほぼ同じ図柄の茶碗である。ただ、献上された茶碗に描かれていたのは桔梗であったのに対し、これは瑞々しい紅色を湛えた葵の花なのであった。

「なんと。」

蕪麻呂は目を丸くした。彼はその前の晩、偶然にも葵の花を夢の中で見たばかりだったのである。葵は紅色の花びらを輝かせながら青く澄んだ空にも静かに咲いていた。蕪麻呂にはまるで夢の中の花がそのまま抜け出てきたかのように思われた。また、花の瑞々しい赤と淡い月の陰影との対照は、明らかに献上茶碗を凌いでいた。

それに先日会ったときには、清繁に自分が献上茶碗を見たとは一言も言わなかったはずである。

「驚かれましたか。」

清繁は微笑んで言った。

「蔵人様は、おそらく先日私が献上した茶碗をご覧になって、それに何かが不足しているとお感じになられたのでしょうか。だからわざわざ私めを都に呼び戻された。お恥ずかしい事ながら、この茶碗を作ってみて初めて、私が求めるべきものがわかりました。本当に大切なのは、土の質でも、事物の形式だてられた美しさでもなく、己が心より美しいと思われるものを完全に形として表すことができたときに、人の共感を呼び覚ますものができるものなのです。そしてそれには己に似合った土壌が何より不可欠なのです。特に私にとって葵の花の紅色は、生涯を共にしてきた者との思い出そのもの。再出発のきっかけを下さった蔵人様への感謝の品として差し上げるにはこれ以上相応しいものはないように存じ

まして。」

「そうであったか。ならばこの茶碗、今一度献上してみる気はないか。」

「と仰いますと。」

「実を言えば、最初に先の献上茶碗のことを気かけられたのは他ならぬ帝でな。今の話をお聞かせ申し上げれば、たいそうお喜びになろう。わしにはそのあとでもう一度焼いてくればよい。なに、もちろんその際にはいろいろと注文をつけに窯に行かせてもらうがな。」

そして蕪麻呂は一首の歌を書き、箱書きとした。

あからひく 月に葵の 君おもう ともに都に 過ごすときをや

清繁は、恐れ多い勿体無いを幾度となく繰り返しながら袖で顔を覆った。そしてそれ以降、彼とその一族が都の窯を離れることはなかった。

蕪麻呂が葵の茶碗を帝に献上すると、帝も大きく頷かれた。

「清繁も蕪もようやった。褒めてとらすぞ。」

「恐れながら、帝には清繁のみをお褒めあそばされます様。私めは何も致してはおりませぬ。」

「よいではないか。褒めてもらうときは素直に受けるものじゃ。これからも二人して酒酌み交わし、清繁によい作を作るようにと言付けてくれ。」

「は。」

「それにしても、そのような友のいること、朕には羨ましいものよな。」

帝は庭を眺めに行くようなふうで部屋から通路へとお出ましになられた。その庭先に、山からの風が静やかに吹き抜けていった。

その四 菊花

嵐の夜

今年もそろそろ嵐山の紅葉が色づき始める頃であろうかと思われる、ある夜のことである。激しい雨のなかで、時折雷（いかずち）が轟いていた。

蕪麻呂の一人目の妻は、当時の女性がおおよそそうであったように、雷の音を怖がる。今夜がこんな嵐になるのならば行ってやっておけばよかったかと、彼は半ば後悔し始めていた。

突然、今までとは比べようもないくらい大きな音がしたので。慌てて葎戸（しとみど）を開けてみると、雨に煙る庭に一人の男の子が立っている。年のころはまだ十（とお）いくかいかぬか、白い童直衣（わらべのうし）を着ている。庭にはそのほかに異変はないようだ。

子供は蕪麻呂が見ていることに気が付くと、つかつかと近づいてきた。

「ここはどこじゃ。鳥羽か。」

「いや、ここは都の東じゃ。」

蕪麻呂は何の気なしにそう答えたが、さて都へ来てここは鳥羽かと尋ねる者もそうはおるまい、一体どこの童であろうかと訝った。

「しもうたな。ちと早う降りすぎたか。」

「そなたは何者じゃ。」

「わしか。わしは東方（ひがしかた）の龍の使いの一人で『沙果（さか）』。鳥羽へ行く途中、雷に乗ってきたのだが思いもかけぬところへ落ちてしもうたようじゃ。地へ降りてしもうたからには、ここからはこの姿で歩いていかねばならぬ。難儀なことじゃ。」

「それなら、また上がっていけばよいではないか。」

「それがそうはいかぬのじゃ。わしはただの使い。自力では雷に乗れぬ。まあ、とはいえわしと話ができる人間も、そういるものではない。しばらくはここにいてもよいかもしれぬな。」

蕪麻呂はそのときまでに、この子供がたしかに人間ではないことに気が付いていた。雨の中にいたというのに、この子の髪や衣服はまったく濡れておらず、したがって土間に上がっても雫が全くつかないのであった。

「茶でも飲むか。」

「いや、要らぬ。ただ・・・。」

「ただ、なんじゃ。言うてみい。」

「いやなに、ただそなたのほうには、わしに尋ねたき事があるのではないかなと、そう思うただけじゃ。」

沙果と名乗るその子は、蕪麻呂の目を見ながらにやっと笑った。やはり見かけは子供であっても彼の脳裏にある普通概念の子供ではないのだと、彼は強く感じた。

「ではぜひとも尋ねたい。私は何故人間でないものたちと話せるのだ。今までも幾度もそんなことがあった。雪割の鼓、赤あざの彩女、霊体と思しき彼らは、みな私と会うまでは言葉が通じる相手とは巡り会えなかったと言う。しかもそれが幾生涯もの永きにわたってらしいのだ。私は、彼らと出会い、話し合ってから後（のち）、自分は果たして普通の人間として生まれてきたのではないのだろうか、と思うようになった。そして今またこうしてそなたとも話をしている。私の心はまるで波立つ海のようなのだ。」

蕪麻呂は本当に戸惑い続けていた。もし龍の使いを名乗るこの子が、その霧を晴らしてくれるものならば・・・。

「では、その海の底深くに真珠があると思っておればよい。水鳥は荒立つ波の中でも光に紛れることなく魚を捕えることができよう。あれは生まれながらにしてそのような眼を持っているからなのじゃ、ただそれだけのこと。」

「真珠とな・・・。」

「合点がいかなぬと見えるの。ならばわしがこれから鳥羽へ行って大津の龍宮に帰るまでついてくるか。きっとそれだけの結果は保証しよう。」

「よいのか。」

激しかったはずの雷雨はすでに通り過ぎていた。
「どうやら雨風（あめかぜ）も静まったようじゃ。行こうか。」

鳥羽

鳥羽は加茂川と桂川との合流地点に当たり、人の行き来も賑やかで鳥羽院の離宮があった。都からは朱雀大路を出て、街道を真っ直ぐに南下する。

秋の早朝の空気は清々しく、そこへ雨上がりの湿った土の香りが加わってたいそう心地よかった。そのまま洛外の川沿いを行けば、白さを増す薄の原のところどころに桔梗の花の紫と葉の緑が点在して蕪麻呂の目を引く。

それにしても沙果は何故（なにゆえ）に自分を伴う気になったのであろうか。沙果は龍の使いだと言った。とすれば、これから伝説に聞く龍と実際に出会うことになるのか。いやいや、これまで自分は実際に霊体たちと幾度となく出会ってきたではないか、今さら龍の存在を否定することはできぬはず・・・彼は己に言い聞かせた。

「あらかじめ言うておくが、龍はそなたらが思い描くよりはずっと温和な生き物じゃ。とてつもなく強いが、繊細でもある。この度のこととて、その繊細さゆえ起きたことなのじゃがな。」

都の南端、羅生門を出て、道々沙果が話すところによれば、龍という生き物は活気ある大量の水が存在するところに幾体か住まっているらしい。そしてお互いの意思の疎通を図る方法としては、彼のような使いを差し向けるほかにも、神通力を飛ばす方法があるのだが、彼の主（あるじ）であるところの大津の龍は、何かしらの事情によって今しばらくのあいだ神通力を半減させてしまっているため、使いを送る方法をとった。肝心の用向きについては、先方の龍に会うまでは他言できぬとのことで、彼はそこまで話すと自分に関することには口をつぐんだ。

一方、蕪麻呂はこれまでのことをすべて語った。沙果はもしかしたら心を読む力を備えていて、自分のことはもうすでに何もかも知り尽くしているかもしれぬと思いながら、それでもあえて話したいと彼が思ったのは、もしかしたらそのような存在に自ら語ることで、自分自身を納得させようとしたのかもしれない。

やがて日も暮れかける頃、二人は二つの大きな川の交わるところに行き着いた。そこが鳥羽である。沙果が川のほとりに立つと、ほどなく大きな水柱があがり、その中から龍が現れた。掌だけで大人の人間の背丈ほどもあろうか。夕暮れの空に浮かぶその様は、勇壮でありまた幽玄でもあった。

「大津より参りました。」

沙果が手を前に差し出して一礼する。それはあたかも異国の挨拶のようであった。

「うむ。」

龍が沙果の体を持ち上げると、彼の体は薄くなり、丸い鏡のように見えた。龍はしばらくの間その鏡を覗いてから考え込むように目を閉じていたが、やがて再び目を開けてこう言った。

「そうか。ならば仕方あるまい。鳥羽の龍は承知した、と伝えてくれ。」

沙果がもとの姿に戻って答えた。

「かしこまりました。」

「時に、そこな人間はそなたが連れてきたものらしいが。」

「はい。邪心がないようなので連れて参りました。あの者は霊の声を聴くことができます。今後、何かと世の役に立つかもしれませぬゆえ、何分にもよしなに。」

「あいわかった。」

龍は初めて蕪麻呂のほうに目を向けた。

「これからは、なんぞあればここへ来るが良い。話し相手くらいにはなろうて。」

それは天を埋め尽くすかと思われるほど大きく、しかし聞く者を安らげるような響きを持った不思議な声であった。

「有難うございます。私は伴蕪麻呂と申します。」

伝説の龍を相手にしているというのに、そのときの蕪麻呂は純粋な気持ちで満たされていた。ひょっとしたらこの龍という生き物は、人間の心を穏やかにする性質をも身に付けているのやも知れぬ。

龍は沙果を地面に下ろして尋ねた。

「さて、沙果よ、雷で送るか、それとも歩いて帰るか。」

「お心遣い有難うございます。ですが今回は帰りもまた歩いて参りとう存じます。この男のためにも。」

「左様か。ではまた会おうぞ。」

龍は夕暮れとともに去り、闇が薄の原を包んだ。

大津

龍の姿が見えなくなると、沙果は来た道をすたすたと引き返し始めた。

「おい沙果よ、ちと待ってはくれぬか。」

都近くまで帰ってきたとき、蕪麻呂はどうとう沙果を引き止めた。

「なんじゃ。」

「先ほどから急に眠気を催した。夜通し歩いてきたゆえ。それに何やら安堵の念もあるようじゃ。」

「なんと人間とは不便なものよ。たった一日で眠くなるか。ならばほれ、これを食ろうてみい。」

沙果は何やら丸いものを蕪麻呂に投げてよこした。食べてみると、それは甘い味がし、ほどなく眠気もだるさもまったく感じなくなった。

「疲れを取ってくれる霞丹じゃ。よく効くであろう。」

「これは有難い。」

心なしか来たときよりも短時間で都に帰りついた二人は、さらに丸一日歩き続けて大津まで辿り着いた。また夕暮れ時であった。公家の中でも比較的広い行動範囲を許されてい

た蕪麻呂ではあったが、琵琶湖を目の当たりにするのは初めてのことであり、その波立つ様や、夕焼けの光のなかに浮かぶ島影の美しさには、言葉もなくただただ圧倒されるばかりであった。

鳥羽のときと同様、水柱から龍が現れ、沙果が挨拶をする。しかし大津の龍は、鳥羽の龍に比べると少し小さめで赤みがかっている。

「ご苦労でした。」

声からすると女龍（めりゅう）のようである。

「鳥羽の御前さまは承知したとの仰せにございます。」

「そうですか。ではまたお入りなさい。」

「は。」

女龍が差し出した掌の上に乗った沙果は、また鏡のような形になった。女龍はそれを自分の胸の近くに嵌め込んだ。沙果とは、女龍の鱗が姿を変えたものだったのだろうか、それとも沙果のような霊体は何千何万と集まって女龍の体を構成しているのだろうか、蕪麻呂にはそのどちらとも判断がつかねた。

「さて、蕪麻呂と言いましたね。」

女龍は壺装束の公家女に姿を変えて岸に降り立つと彼を見据えた。瞳の色と肩の辺りで結んであるらしい髪はともに赤く光っていて、全体的に体つきがふっくらとしている。

「あなたと話すにはこのほうが都合がよいでしょう。」

「失礼ながら、もしや身籠られているのでは。」

「はい。もうすぐ生まれます。そしてこのややは、千年の間ここに棲むのです。」

彼女はそう言っておなかをさするのように手を当てた。蕪麻呂はその姿に人と変わらぬ強い母性を感じた。母は子を守り育て、深い愛情のすべてを注ぐ。この上なく優しく、そして時には何よりも強い。

「思いがけず沙果の道連れとなり、さぞかし驚いたことであらましようね。」

「いえ、私は異形（いぎょう）にはもう慣れておりますゆえ。何故かはわかりませぬが。」

「そのことですが、それは先ほど沙果があなたにお話しした通り。いわば、この世の色というものは、波の上で乱反射する光の粒のようなものなのです。例えば沙果もそのひとつに過ぎません。童姿の沙果も真（まこと）なら、私の一部となっていたときの沙果もまた真の姿。どちらが真の姿なのかと考えても仕方のないこと。すべての生き物は流転し、刻々とその姿を変えていく。それと同じです。おおよその生き物の視線は光に遮られているので、海の底が見えないのですが、自然界の理（ことわり）として時折、水鳥の目を持って生まれてくるものが現れるのです。人間にも鳥にも獣にも魚にも。だからあなたは気に病むほど特別な存在ということではないのです。そう、ためしに菊花の宴で周りをよく見渡して御覧なさい。きっと何かを見つけることができるはずです。」

「菊花の宴・・・。」

「それから、戦乱はもうすぐ収まります。」

「本当でござりまするか。」

「でもその代わり、都の力は東に移っていきます。若く力のある龍がかの地に移り住んだからです。いわば京の都は、栄華と引き換えに暫しの平安を得るのです。でもそのときに、

何を得、何を失うかはあなたたち次第です。そのことはよく心に留めておいて下さい。」
女龍は、それだけ言うと、暗闇の中に消えていった。そしてそれを見送った蕪麻呂は激しい睡魔に襲われ、その場に崩れ落ちるようにして、ぐっすりと眠り込んでしまった。

菊花宴

気がつくと、蕪麻呂は自分の部屋の寝床にいた。太陽が少しだけ西にあるところをみれば、まだ昼過ぎて間もない頃のようなようだ。だが自分の記憶が確かなら、確か先ほどまで琵琶湖のほとりにいたはず。それが何故、見慣れた部屋にいるのか。

「お目覚めでございますか。」

しばらく呆然としていると、女中頭が顔を出した。

「うん。」

「今日はたまたま物忌みの日でございますから、お目覚めの刻限が多少ずれましても構いませぬが、三日後の菊花の宴の日にはもう少し早めにお起きになられたほうがよろしゅうございます。」

「なに、三日後とな。明日ではないのか。」

「いいえ。今日はまだ六日でございますから。」

「してみると今は、嵐の夜の翌日になるのか。」

「そうに決まっていますわ。変な旦那様でございますこと。」

女中頭は彼が寝ぼけているとでも思ったのであろう、あきれた顔をして行ってしまった。

おかしい・・・。蕪麻呂は粥をすすりながら日を数えた。沙果が来た日はたしか五日の夜遅くであった。それからその夜一晩かけて鳥羽まで行き、次の日も一日歩き通して、次の夜は天津で眠りこけたはず。それがあれからわずか半日しか経っていないなどは。現に、歩き疲れたときと同じように足はだるく重く、痛くもなっているではないか。あれはやはり夢などではないのだ。もし夢でないとするならば、とりあえずは、あの女龍が時を超えて送り届けてくれたものとも思うことにしよう。

それから当たり前のように平穏な三日間が過ぎ、九日、重陽の節句となった。宮中では恒例の菊花の宴が開かれ、殿上人たちには大広間で菊花酒が振舞われた。蕪麻呂は菊の花の清楚な香も愛していたので、毎年行われるこの行事をことのほか楽しみにしていたのだが、その年は少し様子が違った。女龍の言葉が耳について離れないのである。あたりを見渡して何が見つけられるのだろうか、と。彼はふと頭上に空を眺めてみたくなって席を立った。

「あ、どちらへ。」同じ蔵人職の定麻呂が尋ねた。

「はあ、どうやら酔うたようで、ちと外の空気が吸いとうなりましてな。」

咄嗟についた嘘であった。実際は酔っているどころか、頭の中は張り詰めてすっかり硬くなっている。

「それはそれは。お気をつけられよ。」

「有難うございます。それでは、しばし。」

彼は庭に面した通路へ出た。冷えた空気が外からなだれ込み、庭の草の間からは鈴虫の音が聞こえる。

「秋、か。」

季節の移ろい、そのなかで人は生き、恋をして、朽ちて新しい世代と入れ替わる。時には転生して別の姿でまた生涯を繰り返す。見上げれば十五夜に向かって明るさを増している九日月（ここのかづき）が、周りの星々の輝きを消し去っている。あの月もいつか遠い未来、消え去ることがあるのだろうか。

それでも・・・と彼は思った。今宵、月は満ちてはいなくとも力強く美しく輝き、日が経って新月となれば、星々も再びくまなく天の原を満たす。日も星も草花も湖も、さらには虫の音（ね）さえも、決してその営みをやめることはない。戦で亡くなっていく者たちもいつかはもとの場所に帰る。ちょうど琵琶湖の岸に寄せて返す波のように・・・、そのほんの束の間の時をどのような姿で過ごそうとも、自分が持てる限りで最高の輝きを放つことができさえすれば、それでよいのだ。桜衣、彩女、清繁、子を産む女龍、そしておそらく今頃は御仏のお傍（そば）で天女によって奏でられているであろう雪割の鼓、彼らのように自分も輝いていたい。あるいはそれを彼らから学ぶことこそが彼の存在理由であり、それ故に数々の出会いが可能になったのやもしれぬ。彼はそのように思い至った。

「何を得、何を失うかはあなたたち次第です。」女龍の声が耳に木霊（こだま）する。

あらためて見上げた月の丸さに、子を抱く女龍の姿が重なる。あの子はもう生まれたのだろうか。彼はふっと微笑んで宴の席に戻っていった。

作品の著作権について：

本作品は、津田理恵子（ハンドルネーム：三毛猫モカ）が「まるまど文学館」サイトにおいて発表したものです。転載・紹介等につきましては、事前に作者当人宛てにメールをいただきたく、何卒よろしくお願い致します。

連絡先： cosmos_biwa@yahoo.co.jp